

# 灯りを消せ！

河合隼雄さんは、よく講演で「灯りを消せ」の挿話を話されています。

私は、このはなしが大好きです。

航海に出かけた船乗り達が暗闇のなかで陸を見つけられなくなりまして。

下手をすれば遭難です。

彼らはいまつを燃やし懸命に陸を探しますが見つかりません。

突然ひとりの男が『灯りを消せ！』と命じます。

他の船乗り達は、そんなことしたらなおさら方向がわからなくなるのではと不思議に思いながらも、その男の迫力におされて灯りを消します。

するとはるか遠くに徐々にうっすらと街の灯りが浮かびあがり、無事に陸にたどり着くことができたという話です。

リクルート社に勤め、50歳を迎えたときの私は、たいまつを燃やし懸命に陸を探していた状態だったのかもしれませんが。懸命であったがゆえに、ものごとの本質を見きわめられなかったのでしょう。そのような状態での私は、キャリアとか、キャリア自律とか口では言いながら、もっとも基本である「ひとは、自分に始まり、自分で終わる」という至極当たり前のことをちゃんとベースにして考えられなかったともいえます。キャリアの定義はさまざまですが、端的に言えば「より良く生きる」ということです。

決して、企業内での問題解決的な生き方のことではないのです。

そして大切なことは、このような、よりよく生きることを考え実行する機会を得ることが、結果として企業内での生産活動に今後ますます大きな影響を与えるということです。

ブリッジズ(Bridges,W.)はトランジションについて3つの段階で説明しています。

- 1.「終焉(ending)」人生の転機は新しい何かの始まりであり、実際は今までの何かの終わり\*
- 2.「中立圏(neutral zone)」一時的な喪失感に耐えることが必要\*\*
- 3.「開始(making a beginning)」第一段階と第二段階を通して実現される「内面の再統合」によって始まるもの

ブリッジズの理論は、人生全体のライフ・キャリアの展開における様々なトランジションを想定した上での構成になっています。このトランジション・モデルをより職業的なキャリアに限定しトランジション・モデルにしたのがニコルソンです。そこでは、「準備」→「遭遇」→「順応」→「安定化」という4段階のサイクルで披露されています。そして、安定期と移行期が繰り返し現れるというライフ・サイクルの考え方をベースとしています。

学術的な理解はできます。

しかし、現実はどうでしょうか。

現実とは、自分自身です。

ブリッジズやニコルソンの言うような、「遭遇」を未だ見たことがない中で、人は「終焉」を前提とした遭遇のパラダイムに転換できるでしょうか。

未だ見ぬものに対して「準備」を開始できるのでしょうか。その「準備」はビクビクした「いざ」という時のための不安払しょく的な問題解決手法の様相になってはいないでしょうか。キャリア自律の思想と活動が、このキャリア・トランジション論にもとづくものであるならば、広大な中間地点の方々には「終焉」とその後の「遭遇」を、臨場感あるものと意識してはじめて成り立つこととなります。

けれども、多くの方々は、そのような「それまで自分を位置づけていた文脈からの「離脱」をなかなか意識しないでしょう。大抵のひとは、いままでの延長線上でキャリアを描くのです。今までの延長線上とは、私から見れば「問題解決型」の世界です。

ゴールと現状のギャップを埋めるというシンプルなアプローチです。

この問題解決のゴールに「今までの世界(文脈)の終焉」を掲げる人は一般的には考えられません。

そうであれば、10年後の世界とか、社会市民としての世界とか、もっとも身近な家族との大切な世界などの世界観は従来通り、仕事とは別物として扱われることとなります。家族は家族で別の現実の世界であり「ワークとライフはバランスさせるもの」・・・と考えることが大抵になるのです。

わたしは、このようなデジタル的で問題解決的な考えは、「非真面目な遊び心」が委縮している状態と捉えます。

真面目が自分自身の「好きなこと」と直結していれば、幸せです。

しかし、ほとんどの場合、問題解決型の真面目さの中では、夢中に仕事をする遊び心の入る余地が少ないと考えます。職務制度も人ではなく職務を中心に事業推進を構築する手法です。コンプライアンスもマニュアルが先行すれば「なぜ」を問う姿勢を薄くします。マネージャーという地位にあこがれ、マネージャーの人たちにあこがれない風土が横行しているのは、このようなことを表していると思います。

「遊び」は、無我夢中です。

ゴールというより、そのことそのものに時を忘れて夢中になる行為です。

仕事の中に遊び心がもっともっと、組み入れられても良いのではないのでしょうか。

変化の激しく、デジタル的な時代の中で、失敗をしないように気をつけ他者からの評価を獲得しようとしがちな現代において、大切なことはこのような、不真面目ではない「本気の非真面目な遊び心」の世界です。

それが、創造性を育む原点だと思うからです。

この遊び心と呼び戻すためには、問題解決型のアプローチでは無理です。

生きるリズムを変える、もっと長くゆっくり考える、もっと広く考える、もっと高く考える、目の前の見えることではなく目に見えないものを大切にする、そしてもっと深く考えるという自分自身のパラダイムの転換が必要だと思います。こころの内側から徐々にこみあげてくるエネルギーの開発です。

右をしても、左をしてもダメな、たいまつを燃やし懸命に陸を探している状態からの脱皮は、右も左も無視して、いったんぼーっとしてみるとか、いったん立ち止まって何もせずに環境の中に身を任せてみるのがとても大切になります。そのような後に、じっくりと心の中に見えてくる自分自身の再発見が訪れます。

しかし、問題解決型の思考からみれば、このようなパラダイムの生き方や働き方は、一見無駄なことのように見えるかもしれません。

灯りを消す、と言うのはやさしいですが行うのは難しいことです。

灯りがあるから先が見えるのではないかと思っているときに、灯りを消して、闇の中でじっと目を凝らす、やがてぼーっと何かが見えてくるのを待つ、という行為。主体的にパラダイムを変える行為です。

そのような世界を自ら味わってみようと考え、実行に移したことが私にとっての独立そのものだったと言えるでしょう。

私自身が、そこでみえてきたものは、「灯りを消せ」と言う人になることではなく、灯りを消したその時に、それぞれの闇からうっすらと見えてくる、その人そのものの何かの発見の瞬間をともに味わいたいというものです。

そして、さまざまな人たちの闇から見えた何かの中に、遊び心が隠されていて、その遊び心がこれから夢中になれる何かの源流であることを発見し、その無我夢中であることそのものが自分であるという実感値につながり、それをもって自分を肯定するという、そんな世界観ができれば素敵だと思っています。

その方が長期的には強い。

その立証に主体的に立ち会おうと決意しています。

\* 1-1)それまで自分を位置づけていた文脈からの「離脱」

1-2)それに伴うそれまでの自分の「アイデンティティの喪失」

1-3)それまで自分を取り巻いていた世界がもうそれまでのようではないことへの「幻滅」

1-4)それまでの将来に関する計画や感覚が失われる「方向感覚の喪失」

\*\*この段階では、喪失に伴う空虚な感覚を受け入れるしかなく、何も生産的なことをしていないような感覚がありますが、自己の内面世界に向き合う段階で、次の第三段階を迎えるための必要なプロセスと捉えています

2013.7.1 黒川 賢一